

## 第4節 世界に貢献する神奈川—湘南国際村の構想

1. 湘南国際村構想のきっかけ
  - 湘南国際村にかけた長洲さんの思い
  - 湘南国際村の構想づくり
  - 始動した湘南国際村
2. なぜ湘南国際村をつくろうとしたか
  - 自治体がつくる国際交流拠点
  - 国際的な役割を果たす神奈川
  - 緑陰滞在型の国際交流拠点
  - 湘南国際「村」とした理由
3. 湘南国際村は何をすところか
  - 多様な学術研究と交流
  - 人材育成の拠点づくり
  - 途上国との技術交流
  - 期待される文化交流
4. 湘南国際村によって地域にどんなメリットがあるのか

### 1. 湘南国際村構想のきっかけ

#### ●湘南国際村にかけた長洲さんの思い

三浦半島の葉山町、横須賀市にまたがる地域に「湘南国際村」というユニークな国際交流拠点がありますが、私はここを訪れるたびに、また近くを通るたびに、長洲さんがこの「村」にかけた熱い思いと大きな夢を思い出さずにはられません。長洲さんは、戦後、憲法によって戦争を放棄した日本の最大の安全保障は近隣諸国との間に揺るぎない信頼関係を創ることだ、そのためには、ヨーロッパでドイツが長い間対立してきた隣国フランスと和解し、ともに欧州共同体創設に尽力したように、アジアでは日本が歴史の反省にたって中国や韓国と真の和解を達成し、相携えて「東アジア共通の家」や「東アジア共同体」づくりに全力を尽くすしかないと考えていました。もちろん、それは基本的には中央政府の仕事ですが、地方政府としてもできるだけ貢献をすべきだというのが長洲さんの考えでした。長洲さんが推進した民際外交もそうした構想の一環でしたが、こうしたコンセプトを込めた国際交流施設の構想も胸中で温めていました。

後に述べるさまざまな経過を経て機会が到来し、長洲さんがこの構想を具体化するために取り組んだ事業が「湘南国際村」だったので。このプロジェクトは県が計画内容を決め、地権者である民間企業がこの計画に協力する、いわゆる「計画誘導方式」によって推進されたものですが、この計画地一八八・三ヘクタール（東京ディズニーランドの約四倍）が近郊緑地保全地域（ただし「普通地域」で保全が強制されないエリアだった）のなかにあったこと、地権者が三井不動産という大手デベロッパーであったことなどから、自然破壊ではないか、大企業救済ではないかなど、プロジェクトに対するさまざまな批判や反対運動が起きました。

しかし、この土地は前知事時代にゴルフ場として開発が許可されましたが、経営不振に陥って倒産し、三井不動産が宅地開発用地として取得していたものでした。三井は県に対して再三開発許可を

求めたのですが、人口抑制策をとる県の開発許可が得られず、長い間荒れ放題のまま放置され、しばしば自然災害を起こしていて、地元住民から再三にわたって防災工事の要望が出されていた問題の土地で、抜本的防災工事をするには巨額の費用を要すること、緑地としても、ゴルフ場開発によってすでに自然植生は破壊されており、むしろ緑の復元が図られるべき状態になっていたことなどから、放置もできず、宅地開発もできず、宙ぶらりんの状態が続いていました。

### ●湘南国際村の構想づくり

そんな時、八二年九月、経済学者として長洲さんの先輩にあたり、県の総合計画審議会の会長でもある都留重人さん（一橋大名誉教授）と、都留さんの友人で元通産次官の佐橋滋さん（財団法人余暇開発センター理事長）から、長洲さんに対して「神奈川に世界に開かれた国際交流拠点をつくってはどうか」との趣旨で「国際経済文化交流センター構想」が提案されました。この構想と長洲さんが胸中に温めていた構想とが、どこか共鳴し合うものがあったようで、長洲さんはこの提案を真剣に受けとめていました。後にこの構想に三井不動産が賛同し、構想に不可欠の公共施設のための用地提供（全体の一〇・四％に当たる一九・六ヘクタール）もふくめて全面協力を申し出たことがきっかけになり、八三年以降、知事の私的諮問機関として「湘南国際村構想懇話会」（都留重人、佐橋滋、吉国二郎、鈴木治雄、上野豊、花村二郎、長倉三郎さんなど）を発足させ、少しずつ構想の具体化への歩みが始まりました。

県は八五年三月、この懇話会の議論を受けて「湘南国際村基本構想」をまとめ、さらに八八年三月にはこの基本構想に基づき「湘南国際村基本計画」を策定し、民間事業者に提示しました。そして八八年一〇月には村の事業計画や広報事業、公園・緑地などの公共施設の維持管理、環境管理など「村役場」の機能を担うとともに、村のシンボル施設である「湘南国際村センター」の建設と管理運営を担当する「湘南国際村協会」が第三セクター方式の株式会社（資本金二五億円、内一〇億が県出資）としてスタートしました。他方、民間事業者は〇〇年二月までに環境アセスメント条例の手続きを終え、県の開発許可を得て一〇月基盤整備事業に着手しました。

### ●始動した湘南国際村

〇二年一〇月には、人文・社会科学を中心とする学術研究、研修、交流などソフト事業を幅広く展開し、村の知的創造と交流、情報発信のセンターとなる「かながわ学術研究交流財団」（K-FACE）が設立（基本財産四九・七四億円、内県の出捐三三・六億円）され、翌月には、協会が事業主体となって、延べ床面積一万五〇〇〇平方メートル、研究室、研修室や国際会議場、百室のホテルも備えた「湘南国際村センター」の建設に着手しました。そして、〇四年五月、センターの竣工に合わせ、湘南国際村の開村式とオープニング・イベントが華やかに繰り広げられました。構想検討の段階から数えて一〇年が経過していました。この時期から民間事業者が民間系の研究所、研修所用地の分譲を始め、村全体が本格始動に入りました。

この湘南国際村構想は、都留さんたちをうまく利用した三井不動産に長洲さんが乗せられたのではないか、という観測が行われ、利権も絡んでいるのではないかといった批判も出ましたが、もちろん、そんなことはありません。湘南国際村にかけた長洲さんの志はもっと高邁なものであり、将来の「東アジア共通の家」をつくるための雰囲気づくりにも貢献できるような、東アジアの知的意思

疎通センターのような国際交流拠点をつくらうとしていたのです。長洲さんは「ヨーロッパには国際問題が起こると、各国の要人たちが三々五々集まってくるスイスのジュネーブのような場所がいくつもある。ぜひアジアにもつくるべきだ。風光明媚でアクセスもよい箱根、湘南がある神奈川は絶好の場所だ」とよく言っていました。

## 2. なぜ湘南国際村をつくらうとしたか

湘南国際村の構想が生まれ、成長し、計画にまで高まっていく過程でさまざまな考え方が重要な役割を果たしましたが、これを主導した長洲さんの考え方のなかで最も重要だったのは次の三つだと思います。

### ●自治体がつくる国際交流拠点

第一は、二一世紀に向けたこれからの国際社会では、国家の役割が相対的に低下していく一方、市民や市民の住む地域、グローバル時代の経済活動の主役である企業などの役割がますます重く大きくなっていくだろう。まだ当分、国家の壁は厚いだろうが、同時に国境の壁を越えて、市民同士、地域同士の交流がますます盛んになり、こうした非国家的活動主体の交流と協力が国家同士の関係にも影響を及ぼす時代がくるだろう。

こうしたなかで、個人も地域も、「国家のなかの個人と地域」という性格と同時に、「地球社会、世界のなかの個人と地域」という性格を強めていくだろう。

このため、地方自治体としても外国の地方、地域との交流・協力を活発にしていだけでなく、自らの地域社会そのものを世界に開かれた地域社会にしていくことが大切ではないか。その努力の一環として神奈川という地域に根ざしながら、世界に開かれた新しいタイプの国際交流拠点をつくる必要がある、という考え方です。

### ●国際的な役割を果たす神奈川

第二は、神奈川は一つの県であるが、国際的に見ると人口や経済規模の点で一つの国ぐらいの存在になっている（国連加盟国で神奈川より人口の少ない国が一一〇ヶ国以上あり、経済規模も中級国家なみ）。したがって、それにふさわしい国際的な責任と役割を果たしていく必要があるのではないか、という考え方です。

ご承知のように、神奈川は全国の〇・六%の面積に六・五%に当たる八三〇万（現在は八六八万）県民が住み、日本の工業生産の約一割（当時）を生産している代表的な産業県の一つですが、この神奈川の人口と経済力を、当時の統計で国際比較してみますと、いずれもスイス、オーストリアよりも大きく、スウェーデンのそれに近い。GNPだけとれば、韓国の一・三倍、インドネシアの約二倍でした。当然ですが、一人当たり県民所得も世界のトップクラスの二・九万ドル。また、神奈川の研究開発投資額は二〇〇億ドルを超え、スウェーデンの三倍ドイツの三分の一になっていました（いずれも当時の数字）。

神奈川がこれだけの経済力、技術力を蓄積できたのは、もちろん八〇〇万県民の努力の結晶ですが、同時に何ひとつ天然資源のない私たちにエネルギーや原材料を供給したり、製品を買ってくれる国

際社会というものがなければ、神奈川の経済も八〇〇万県民の生活も成り立ちません。

したがって、神奈川はすでに世界経済いや地球社会の相互依存の網の目のなかにしっかり組み込まれており、この国際社会から疎外され、孤立したらたちまち滅びてしまう。生きるために「世界を必要とする日本(神奈川)」は「世界が必要とする日本(神奈川)」にならなければ生き残れないというのが、長洲さんの強い信念でした。日本は世界の厚生省、環境庁、科学技術庁になるべきだというのが長洲さんの持論でした。

そこで、神奈川としても日ごろから大変恩恵を受けている国際社会に対して、何らかの国際貢献をしていくべきではないか、神奈川ではそのため地球環境問題、国際人権問題、非核兵器具宣言、N G Oの支援、民際協力基金づくりなど、さまざまな活動をすでに展開してきていましたが、世界に開かれた国際交流拠点をつくることも、地域からの国際貢献のひとつになのではないかとこの考え方です。

### ●緑陰滞在型の国際交流拠点

第三は、東京都、千葉県などの東京湾岸はじめ、大阪、神戸など全国的にも国際交流拠点づくりが進められていましたが、それはいずれも都心部にビジネスセンターをつくり、そのなかに位置づけられるものが多かったのです。そこで私たちは、こうしたものとの競合、重複を避けるため、むしろそれを補完するものとして、都心ではなく、緑豊かな郊外に緑陰滞在型の、そしてビジネス交流中心でなく、学術、文化、教育中心の国際交流拠点をつくるべきではないか、またそれを通じて新しいタイプの地域振興を図っていこう、という考え方でした。

### ●湘南国際「村」とした理由

以上のような三つの考え方を中心に、湘南国際村のコンセプトが固まっていったわけです。なお、ネーミングに「村」という言葉が使われた経緯ですが、私が八二年、アメリカ国務省の招待で東海岸から西海岸まで三〇日間の視察旅行をした際、アーカンサー州リトルロック市郊外のウインロック・インターナショナルという農場や農業系研究所などが集積しているところを訪ねましたが、プレジデントとの会談のとき、当時の仮称「国際経済文化交流都市」を使って、このプロジェクトについて説明したところ、「そのコンセプトならく都市>ではなく、<村>の方がいいのではないか。アメリカでは<都市>のイメージが悪くなっている。村の方が新鮮だ」と指摘してくれました。帰国して長洲さんに報告し、提言したところ賛成してくれまして、構想懇話会の賛同を経て「湘南国際村」の名称が定着しました。英文の Shonan Village はこれを受けて都留さんが発案されたものです。

## 3. 湘南国際村は何をするところか

湘南国際村の機能として、学術研究、人材育成、技術交流、文化交流の四つが考えられていましたが、一番難しく、また大切なのは学術研究と人材育成だと考えていました。

### ●多様な学術研究と交流

学術研究分野では、国連大学の誘致には東京都との競争に敗れ、失敗しましたが、幸いにも日本で最初の国立総合研究大学院大学の誘致が決まったことが大きかったと思います。当時の学長は文化勲章受章者の長倉三郎博士でしたが、全国の大学や国立民族学博物館、統計数理研究所、国立天文台、核融合科学研究所、宇宙科学研究所、国立遺伝科学研究所など二〇近い研究所との連携のもとに、内外から最高の頭脳が選ばれて集まっており、高レベルの学際的な研究教育活動が行われています。将来はノーベル賞級の学者、研究者がたくさん生まれることが期待されている大学院大学です。九五年に開校し、その後も施設の整備が進み、研究成果も充実してきています。

また、植物生態学者として著名な宮脇昭さん(横浜国大教授・当時)がその実現に大変尽力された(財)国際生態学センターも大変ユニークな研究センターになりました。世界の生態学者の連合体であるインテコル (INTECOL) が中心になって作られたこのセンターは、地球の緑を保全、復元し、創造して、地球の生態系を守ることを目的にしており、人類の緊急課題である地球環境問題への貢献が期待されていますが、すでに日本各地はもとより ASEAN 諸国や中国の緑化プログラムの推進に大きく貢献しています。現在は事情により横浜市内に事務所を移していますが、いずれ国際村に戻るのではないのでしょうか(なお、環境問題では県が誘致したより大型の研究機関である(財)地球環境戦略研究機構 (IGES) が〇二年にオープンし、本格的活動を始めています)。

その他、ハーバード大学日本研究センターやアスペン研究所の日本ブランチ、スウェーデンのカロリンスカ研究所(医学)アジアセンターの誘致などの構想がありましたが、いずれも実現しませんでした。ただし、先述の(財)かながわ学術研究交流財団 (K-FACE) が中核となり、アスペン研究所や国連大学との連携プログラムによる学術研究や交流が多彩に展開されています。K-FACE は発足早々「地球化時代の地域の役割」をテーマに活発な研究活動を展開しましたが、オープニング・イベントでは「二〇世紀の総括と二一世紀の展望」「文明と宇宙—現代科学を問う」「二一世紀の国連」、その他「国際化セミナー」「エコロジー教室」などが立地した各機関との連携のもとに多彩に展開されました。

いずれにしても、学術研究の分野では、人類が直面する大型の課題—地球環境、資源・エネルギー問題、人口問題、飢餓と貧困、生命科学、平和問題などについて、世界の英知を結集し、人類の未来を照らし出すような研究テーマにチャレンジしていくというのが基本課題です。

### ●人材育成の拠点づくり

人材育成の分野では、(財)社会経済生産性本部の生産性国際交流センターの誘致が決まり、九六年にオープンしています。能率よくモノをつくるという意味での生産性では、日本はすでに世界のトップクラスであり、したがって生産性本部は日本国内ではおおむね歴史的使命を終えているといってもいいでしょう。今後は社会生活レベルでのゆとりや豊かさをどう創りだしていくのか、つまり個々の企業レベルでなく、社会的な生産性といったことが課題になっているのです。

しかし、他方、途上国やソ連体制崩壊後市場経済に移行した国々から見れば、どうしたら日本のように生産性が上がるのか、品質管理がうまくいくのか、といったことが最大の関心事なのです。とくに中国、ロシア、東欧などには、長い間民間企業というものがなかったので、企業経営のノウハウが絶対的に不足していますし、経営者の人材をどう育成していくのかも大きな課題です。

そんなわけで、日本から企業経営のノウハウを学びたいという要望が大変強いのです。そこで通産

省（当時）は所管の公益法人である日本生産性本部を改組して国際研修センターをつくり、こうした国々への知的支援を強化して、日本らしい国際貢献の一助にしていこうとしたわけです。湘南国際村にその拠点が構築され、数々の充実した活動が展開されています。

### ●途上国との技術交流

技術交流も大きなテーマです。日本の高い技術を途上国、とくにアジア諸国にどう移転していくかが大きな課題になっています。どこの国も日本から技術を学びたいと思っていますが、その場合、ハイテクだけでなく、中級、初級技術への要望も強いのです。とくに品質管理も含めた生産技術への需要が大変強い。

すでに大量の技術研修生が中国はじめ世界中から神奈川にきていますが、彼らのニーズはきわめて高度のものから全く初歩的なものまでさまざまです。湘南国際村での技術交流の目玉をどこに置くか工夫が必要になります。

多くの企業の研究所、研修所が立地していますし、さらに「かながわサイエンスパーク＝KSP」にある神奈川科学技術アカデミー（KAST）や神奈川高度技術支援財団（KTF）、さらには産業技術総合研究所など県立の一四の試験、研究機関などとの連携も必要になっていくでしょう。

### ●期待される文化交流

文化交流については、湘南国際村全体が一つのキャンパスであり、コミュニティーになっていくわけですから、当然、生活の交流があります。異文化との出会い、ふれあい、相互理解が日常的に行われます。そのための施設として湘南国際村センターや交流ホール、ホテルなどのほか、将来の構想としては外国料理の店が並んだ街も考えられていますし、若いアーティストのメッカにしていこうというアイデアも考えられています。

## 4. 湘南国際村によって地域にどんなメリットがあるのか

先にも触れたように、湘南国際村は三浦半島の地域振興という課題も抱えています。工場誘致型の地域振興でなく、自然豊かで風光明媚な地域資源を活用した緑陰滞在型の国際的学術文化交流拠点をつくって地域振興を図ろうという新しいタイプの地域振興を考えたのです。このため村の完成イメージとして、次の四つの目標が掲げられました。

- ①全体が緑豊かな公園のような村（民間事業者との「みどりの協定」で五一万本の植樹計画など）
- ②知的創造が行われる村（日本のCOE＝センター・オブ・エクセレンスを目指す）
- ③国際色豊かな楽しいコミュニティー
- ④高度な情報の発信、受信の拠点

これをもう少し具体的なイメージにしてみますと、

- ① 国際水準の美しい街並みができる

外国の街を歩いていると、緑や公園が多く、景観に十分配慮した驚くほど美しい街並みを持った都

市が多い。とくに大学のある街は大学をコアにして大変風格のある街並みがつくられている。湘南国際村もこうした公園都市のような街にしていきたい。

② 世界に開かれた街—世界をじかに感じられる地球市民の街

湘南国際村にくと、どこかの国の国民というより、地球社会の市民であることが実感できるような街にしていきたい。国籍、人種、言語、性、年齢、ハンディキャップなどによる差別のない、開放的で人間的な街にしていきたい。

③ 知的刺激のあふれる街—二一世紀の見える街

世界から情報を受信し、世界へ情報を発信する情報拠点にしていくためには、世界の最先端の情報に触れる機会が大きく開かれていなければなりません。もちろん、楽しく、面白く、すぐ役立つ情報もありますが、人類の生存にとって不可欠の重要な知識・情報が創造され、発信されるとともに世界中の知的センターから届く情報の受信が行われるので、知的刺激にあふれた街になります。

④ 生涯学習大学のキャンパスになる

人生八〇年時代になる一方、世の中の変化が激しくなるので、世の中の動きに追いついて、充実した生き方を続けるには、生涯かけていろいろなことを学ばなければならないし、また学べる時代になったわけです。これは素晴らしいことで、湘南国際村そのものが生涯学習大学のキャンパスのような街になるだけでなく、おそらく、さまざまな生涯学習プログラムがつくられることになるでしょう。

湘南国際村は、その成長期に九〇年代の日本経済の長期低迷期に際会したため、民間系の研究所や研修所、住宅などの集積が計画より遅れているようですが、ペースダウンしながらも徐々に集積が進んでおり、進出機関同士の連携もしだいに緊密化し、日本とアジアの頭脳センターとして実力を蓄えつつありますので、やや長期のスパンで考えますと、将来のアジア共同体形成に向けて知的交流拠点、異文化、異民族の相互理解のセンターの一つとして大きな役割りを果たしていくことが期待されます。近年、有事立法はじめ軍事優先の安全保障論が盛んですが、長洲さんが湘南国際村にかけた夢—「近隣諸国との友好関係こそ最大の安全保障」と言う考えを改めて噛みしめたいと思います。